2024

藍里病院

8月　依存症家族勉強会のお知らせ

行動の見え方について（９）－中動態の世界－

「意志神話」について考えてみましょう。その人が自分の意志で依存行動をしているのかどうか。その人の意志次第でなんとでもなるのかどうか。この議論になると、能動態と受動態、英語の文法の勉強みたいな話になるのですが、中学校の英語の文法で習うのは能動態か受動態です。私（主語）がこうするというのが能動態。私がこうされるのは受動態と言います。これしか教わってないので人間の行動は能動態か受動態しかないと僕たちは思っています。そんな単純な思考になっています。実は古代ギリシア語が使われてた時代から中動態っていうのがあったそうなんです。

中動態とはかつてのインド＝ヨーロッパ語にあまねく存在していた態である。現在の英独仏露語などのもとになった諸言語のグループ（語族）のことで、これに属する諸言語は、古代―確認されている限りでは少なくとも8000年以上前の時代―より、インドからヨーロッパにかけての広い範囲で用いられてきた。それらの言語が持つ動詞体系には長きにわたり、能動態と受動態の対立は存在しなかった。その代わりに存在していたのは、能動態と中動態の対立である。われわれは能動態と受動態を対立させる考えに慣れきってしまっているためにこれを不思議なことと思ってしまうが、受動態はずいぶんと後になってから、中動態の派生として発展してきたものであることが比較言語学によって、すでに明らかになっている。

（『中動態の世界―意志と責任の考古学』國分巧一朗）

能動っていうのは主体があって、主体から動詞が出発して対象で完結する、ということです。中動態は、『能動では動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程を指し示している。これに対して、中動態では、動詞は主語がその座となるような過程を表している。つまり、主語は過程の内部にある。』と説明されています。「治る」という現象は中動態だとされています。ちょっと考えてみましょう。

能動・受動で考えたら、治療者が治す、患者は治してもらうという関係になります。果たして、本当にそういうものなのでしょうか？治療者はなにがしかの治療行為を患者に提供します。患者は提供され働きかけられたことを受け取ります。が、実際は一方通行で起きているものではありません。病気が治るということは患者の中で起きることですが、それは治療者が「治る」を患者に注入したわけではなく、治療者の働きかけと患者の受け入れの相互作用の結果、患者の中で「治る」という現象が起きます。例えば、医師が処方した薬を患者が飲んで症状が改善したとき、医師が治したというのはおこがましいですよね。事実はそうではない。薬を選択し提供するまでは医師の領域。それを飲むのは患者の領域。「こんな薬効くわけないわ」と飲むのか、「いい薬だからきっと効く」と思って飲むのかなどは患者の領域。その薬が患者の体に作用してなにがしかの効果が生まれ症状が消える。それはもう患者の意志の領域ではない。患者の体という自然の中で起きたこと。こう考えていくと、誰かが誰かを治すという単純な構図は事実に合わないということがわかります。そういう意味で「治る」は能動態でも受動態でもない。中動態の世界です。

では「欲する」という現象はどうなるでしょうか？飲酒欲求も何かの影響を受けて、例えばテレビのコマーシャルを見たとか、嫌なこと言われてむしゃくしゃしたとか、それで酒でも飲みたいという欲求が生まれます。その欲求はその人が自ら起こしたのではなく、それまでの流れや経過があって、いろんな影響の中から発生したってことですね。中動態は「その人が飲みたくなって飲んだ」というような単純なことではない、という物事の見方です。こう考えると能動態・受動態だけで物事を見るのはとても視野の狭い、思い込みの強いものだということがわかります。つながりをすべて断ち切って、その瞬間だけを取り取って評価判断していることになります。身もふたもないってこういうことなのではないでしょうか。

人間をはじめとした自然界の現象はこうなのではないでしょうか。コップの水を飲むという行為であれば、確かに自分の意志で飲んでいます。しかし、なぜ飲みたくなったかまで考えると、暑いとか、興奮したとか、塩っけのあるものを食べたとか、水を飲みたくなるまでの過程があるわけですね。飲水欲求がその人の中から突然生まれたんじゃなくて、いろんな作用を受けて飲みたくなって（飲水欲求が起きて）、その人が水を飲んだという行為が起きた。単純に能動態・受動態だけでは説明できないんじゃないかという考え方ですね。治るっていうことも繋がりの中から発生する。治るとか、治療するとかを考えるとき、それは中動態の世界で起きていると。そういう見え方が大事だと思います。そうすると、治療って「自分がやった」「自分がそうさせた」というような狭い単純系の話ではなくて、もっと広いところで起きるものだと見えるようになる。治療という世界が広がっていく気がします。自己責任論というのは、こういった繋がりをぶちぶちぶちぶち切って、その人の行動の瞬間だけを見て判断を下したものだということがよくわかります。

「分かる」もより深い分かり方は中動態だと思います。自分の中から生まれるのではなく、向こうからやってくる、中空に降りてくる、そんな感覚、それが中動態の世界です。誰かと話をして、その人のことがより深く、ああそうなんだなって「分かる」ことってあると思うんですが、そのときの実感としては「向こうからやってくる」あるいは「空から降ってくる」みたいなことじゃないかなと思います。意志と責任の世界では、自分が聞く、自分が話す、自分が見る、自分が観察するという行為だけになってしまう。「分かる」とか「理解」という現象はそういうものとは質的に違う、広いつながりの切れない世界で起きていること。そういう捉え方をすれば、医療行為はうんと変わってくるような気がします。依存症治療は中動態の世界だと僕は思います。

（以下、次号）

家族勉強会Aについて　参加ご希望の方は、当院アディクション委員まで連絡いただくか、アンケート用紙にその旨を書いて郵送してください。参加できるかどうか折り返し連絡します。
※動画配信について　家族勉強会Aに参加できない方のために勉強会を録画しています。これまでと同じ形で配信します。

家族勉強会Bについて　参加ご希望の方は当院アディクション委員までご一報ください。

8月10日（土）AM10時～家族勉強会B（意見交換会）/依存症研究所・研修ホール

8月24日（土）AM10時～家族勉強会A（講義）/依存症研究所・研修ホール